コクハクセンセイ

改樹考果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コクハクセンセイ

【Ｎコード】
Ｎ６１０８Ｆ

【作者名】
改樹考果

【あらすじ】
「ねぇ先生」「なんだい？」「……先生は、どうして先生なの？」その問いは、彼女と彼を繋ぐものであり、彼女と彼を隔てる壁。彼女は純粋に彼と繋がり、彼との隔たりに嘆く。彼は大人として彼女と繋がり、彼女との隔たりを強くする。だからこそ、彼女と彼は、

★彼★

「ねぇ先生」

「なんだい？」

「……先生は、どうして先生なの？」

私の生徒である彼女が、泣きそうな顔をして私にそう言った。

いつも笑顔を私に向けてくれる彼女の顔が、今は悲しみで歪んでいる。

ああ……そうか、彼女の思いは……

「……君が私の生徒だからだろ」

私の答えに、彼女は少しだけ微笑んだ

「……うん。そうだね……ねぇ、先生」

「なんだい？」

「……ううん……何でもない」

★彼女★

一目惚れだった。

教室で初めて会った時、私の胸は高鳴った。

その時はどうして惹かれたのか分からなかったけど……今は分かる。

彼が、先生が、私がずっと憧れていた父親そのものだったから……。

先生の優しく笑った顔。

先生の厳しい怒った顔。

先生の穏やかな微笑み。

先生の……彼の……。

★彼★

彼女の気持ちは、教室で初めて出会った頃から感じていた。
不安や期待をそれぞれ見せる生徒達の中で、彼女だけは、まるね熱にでも浮かされたかのように……私を見る彼女。
その見せる感情の違いに、私は彼女が自分に恋をしたと感じた。
同時に、何を馬鹿な事を思っているだ。っとも思い。
仮に……そうだったとしても、それで私と彼女の関係が変わる事はない。
私は教師で、彼女は生徒。
そう思って、私は気付いた彼女の気持ちを否定し、私は彼女に対して他の生徒と同様に扱った。
そうすれば、彼女の思いもきっと冷めるだろうと……そう考えていた。
だが……彼女の思いは、冷めるどころか、より熱を持ち始め……偶然、二人っきりになった時、
「先生。先生はどうして先生なの？」
そう泣きそうな顔して問われてしまった。
そして、気付いた。
彼女の思いは……本物なのだと……。
だが、それでも、私は彼女の思いに応える事が出来ない。
年の差もあるが……何より、私は彼女の先生なのだ。
……だからこそ、だからこそ、彼女は溢れ出す思いを抑え切れずに、あの問いを口にしてしまったのだろう。
……出来る事なら……出来る事なら……彼女の思いに応えたかった。
何故なら……あの問いを問われた時、私も……彼女に強く惹かれていたのだから……

★彼女★

先生の様子がおかしかった。
私が思わず告白しそうになった次の日。

いつもは私が声を掛けると、真っ直ぐな瞳で私を見て、微笑んでくれるのに……目線を逸らされてしまった。
……ごめんなさい。
ごめんなさい。
ごめんなさい先生。
直接言葉にしなくても……先生が……あなたが困る事は分かってました。
……でも……言わずにはいられませんでした。
どうしようもなく、抑えられなくって……。
こうなる事は分かっていても、
悲しいです。
辛いです。
……切ないです。
胸が苦しくて……

気が付いたら、職員室の前まで来ていた。
何の理由も無いのに……あなたに……会っちゃいけないって分かってはいても……あなたを……
どうする事も出来ず、職員室のドアの前で立ち止まっていると、
「見合いですか？」
そんなあなたの声が聞こえてきた。
ミアイ？みあい？見合い！？
言葉の意味を理解して……私は心臓が止まったかと思うほど……

★彼★

「見合いですか？」
職員室から出ようとした時、不意に校長から声を掛けられ、「君、見合いをしてみないか？」っと言われた。
「君もいい歳だ。そろそろ一人身と言うのもどうかと思ってね。丁度私の知り合いの娘さんに、君と同じぐらいの娘がいてね。どう

だね？会ってみるだけでも」
「……お気遣いかい感謝いたします……ですが」
「噂になっているのだよ」
それまでにこやかに話していた校長が、急に厳しい表情になった。
「……噂ですか？」
「どんな噂か……言わなくても心当たりがあるだろう？」
……思い当たるとしたら、彼女の事しかない。だが、
「その噂が嘘か真実かは、詮索はしない。だが、君には教師としての自覚を持った行動を取って貰いたい」
「……勿論です」

★彼女★
「……勿論です」
その彼の言葉に……気が付くと私は涙を流していた。
嫌だった。
彼が一回りも年の離れた人だからって、
彼が私の先生だからって、
彼がお見合いをするからって、
……何だって……何だって言うの！？
……もう嫌だった。

でも、
好き。大好き。だから、

★彼★
手紙があった。
彼女からの手紙が、私の車のワイパーに挟まれていた。
なんだか嫌な予感がし、私は慌ててその手紙を読むと……そこには、『屋上で待ってます』っと一言書かれていて……。

時間は既に夜。
今日は満月が出ているとは言え、屋上に光源はない。
そんな場所に、彼女はもういるはずはないと考えながら、私は屋上に来ていた。
屋上の鍵がかけられていない事に疑問に思いながら、屋上を見回すと……誰もいない。
ほっとする反面、心のどこかでは、
「先生」
後ろから声がした。
慌てて振り返るが、背後には誰もいない。
「先生、こっち」
声は上の方からした。
上を向くと、出入り口の上に私に背を向けて彼女が立っている。
「ねえ、先生。お見合いするってホント？」
何で彼女がその事を知ってるんだ！？
「ねぇ、先生」
「……そんな事より、危ないから、そこから降りてきなさい」
私が問いをはぐらかして、そう言うと、彼女は振り返った。
「そんな事じゃ…ないもん」
暗さで表情は見えないが……泣いている気がした。
「いいから、降りてきなさい！」
「じゃあ……私を受け止めて先生」
はぁ？って！っちょ！
止める間もなく、彼女は私目掛けて飛び降りた。

★彼女★

飛び降りた私を、先生は慌てて受け止めてくれた。
でも、勢いがあったせいか、先生はそのまま倒れてしまう。
痛そうにする先生の胸に私は顔を埋めた。
「初めて先生にこんなに近付けた……」

「き、君ね……」
少しだけ怒った感じに何かを言い掛け、先生は深い溜め息を吐いた。
そして、自分の胸に顔を埋める私の頭を、ゆっくりと撫で始めてくれて……嬉しくて……
私は何も言えなくなった。
先生も何も言わなくて……。
月明かりに照らされる屋上で、私と先生は、まるで
『恋人』
の様に抱き合い、寝転んでいる。
そう思うと、胸が苦しくて……でも、嬉しかった。
だから、
「ねぇ、先生」
「なんだい？」
「先生は……先生は、どうしては先生なの？」
「君が…私の生徒だからだよ」
「……じゃあ、先生……私が先生の生徒じゃなくなったら……先生は何になるの？」

★彼★
その問いに、私の口は自然と、
「君を好きな只の男」
っと言ってしまっていた。
しまった！
っと思わず出た言葉に、そう思ったが、同時に、
やっと言えた。
っとも思えた。

★彼女★
彼の突然の告白に、私の胸は高鳴って、

「じゃあ、私！学校を辞める！」
っと言ってしまって、
それまで撫でていた先生の手に、頭を小突かれた。
「今の君は私の生徒だ……そんな事、認められない」
「でも、だって……そうしないと先生は……」
お見合いをしちゃうんでしょ？
その言葉を口にする事が出来なかった。
でも、彼は、私が何を言いたかったか分かったみたいで、
「見合いは行かないよ」
って言ってくれた。
「ホント！」
「ああ、行かないよ」
「じゃあ……じゃあ、待ってくれるの？私が卒業するまで？」
「待つよ」
「卒業するまで、ずっと好きでいてくれるの？」
「君が、私を好きで居続けているなら」
「絶対！ずっと好きでいるよ」
「……なら、

★彼★
誓ってくれ」
「何を？」
そこで初めて彼女は私の胸から顔を上げ、喜びで満ち溢れている
その顔を私に向けた。
「君が卒業した時、君が僕に告白をしてくれると」
彼女はその私の言葉に、何を当たり前の事を言ってるんだろう？
って顔をしたが……これは大事な事だ。
私は彼女と大きく年が離れている。
それは、彼女より先に老い、先に死ぬ確率が高いと言う事。
そして、彼女自身が、非難と好奇の目に晒されると言う事。

それは、彼女が生徒じゃなくなったとしても、変わらない。
だから、彼女自身には、付き合う覚悟が必要になる。
それは、これから、彼女にとっても、私にとっても長い時間の中で、彼女自身が自身に問い掛け、答えを出してもらわなくてはいけない事。
今の様に、恋が先行している状態ではなく、普段の彼女がだ。
……私の覚悟は、もう出来ている。
彼女が告白出来ても、出来なくても、そのどちらであってもいい覚悟を。
じゃなきゃ、こんな事を、自分の生徒に迫ったりしない。
だから、
「誓ってくれ」
その覚悟を得る為の、ほんの少しの手助けとする為に、

★彼女★

真剣な彼の顔に、私は少し戸惑ったけど……きっと、これは彼が、彼と私に必要な事だと思って言っているんだと感じた。
だから、私は、
「誓います」
彼の顔に自分の顔を近づける。
「卒業したその日。きっと、あなたに告白します」
彼と私の唇が、重なり合う、
「だから」
その直前で、私は顔を近付けるのを止めた。
「この続きはその時まで……」

★彼★

卒業式の日。

彼女と告白の誓いを交わした場所で、彼女は、初めて私の名前を呼んだ。

……そして、

『コクハクノセンセイ』終

（後書き）

書くのにやや手間取った為、上手くいったか分かりませんが、いかがだったでしょうか？
一様、『ダレモシラナイコクハク』に続く、禁断系をイメージして作ったんですが……三日も掛けて途切れ途切れで書いた為、当初の予定とは大分違う感じになったような、なってないような……少々混乱気味だたりします。
まあ、それでも、面白いと感じてくれたら幸いです。

ちなみに、タイトルのセンセイは『先生』と『先に誓う』と言う意味のつもりで書きました。
告白する、される先生。
告白を先に誓う。
……まあ、そんな感じです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6108f/

コクハクセンセイ

2010年10月16日11時03分発行